

Unseasonable Christmas:An Essay on two German Christmas Novels for Children from 1933

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: SATO, Fumihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00066972

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



季節はずれのクリスマス

—1933年ドイツのふたつのクリスマス児童文学について—

佐藤 文彦

0 はじめに

エーリヒ・ケストナー (Erich Kästner, 1899-1974) の『飛ぶ教室』*Das fliegende Klassenzimmer* (1933) は、ドイツ語圏のみならず、世界文学を見渡しても、20世紀を代表するクリスマス児童文学のひとつに数えられるだろう。家族でクリスマスを祝う風習は、ドイツ語圏では19世紀を通して近代市民家族の展開とともに普及した。しかし、おもに寄宿学校が舞台の『飛ぶ教室』に描かれるクリスマスは、必ずしも家族のそれではない。

『飛ぶ教室』が発表されたのと同年の1933年、ドイツではもうひとつのクリスマス児童文学が出版された。フリードリヒ・シュナック (Friedrich Schnack, 1888-1977) の『おもちゃ屋のクリック』*Klick aus dem Spielzeugladen* である。この作品で描かれるクリスマスは、都市ドレスデンに暮らす少年少女のそれである。しかし彼らもまた、父子家庭の子であったり、孤児であったり、両親と子から成る近代市民家族の一員ではない。

本論はこれら2作品をもとに、19世紀型市民家族の象徴であったクリスマス(文学)の変容について考察する。1933年は、ナチスが政権を掌握した年である。ことさらそのことにこだわるつもりはないが、すでにヒトラーが登場していた時代のドイツ児童文学は、近代市民家族の祝祭であったはずのクリスマスをどう描いたのか。19世紀のそれとは異なる1933年ドイツのクリスマス児童文学の特徴の抽出に努めたい。

1 近代市民家族と19世紀ドイツ語圏のクリスマス文学

1-1 近代市民家族とドイツ児童文学の誕生

中世から近世初期にかけての全き家あるいは大所帯家族では、血縁や親族ではない奉公人もまた、家族の主たる構成員に含まれていた。なぜなら当時の家族は、生産の場として機能していたからである。その後、行政機構の拡大によって官吏の需要が増すと、教養市民層の家長は家の外に仕事を持つようになる。あるいは工業化によって経済ブルジョワジーが力をつけてくると、彼らも家の外でより大きな経済活動を行うようになる。こうして家庭は生産の場としての社会的機能を失い、もっぱら私的な生活空間、あるいは消費の場に縮小されていった。その結果誕生したのが、両親と子から成る血縁集団、すなわち近代市民家族である。

近代市民家族の配偶者の選択では、親の意向に沿って家柄や実用性を重視することよりも、当事者間の恋愛が理想視された。やがて夫婦間の愛情は子どもにも向けられるようになる。イデオロギーとしての母性愛が提唱され始めたのも、18世紀末から19世紀にかけてのことである。子どもの教育（人格形成）に関し、啓蒙主義の思想では情緒的な母より理性的な父のほうがふさわしいと考えられていたが、この考えも時代とともに変化していく。

父親が教育担当者となったのは、父親の権威を実現するためでもあった。当時の教育理念は、教育者と生徒のあいだに一定の距離が必要だと考えていたので、愛されるとともに畏れられる存在だった父親が教育者に適していたのである。[中略]

だが、学校教育が発達し、職場が家庭外へ移るにつれて、「公的な空間」と「私的な家庭領域」とのあいだに引かれる境界線は鮮明さをまし、それとともに子ども期の自叙伝のなかで父親の姿は遠い存在になっていく。かわりに母親が、育児だけではなく、子どもの教育の担い手としても浮上してくるのである。¹

親子から成る小家族の情緒的な結びつきを確認する風習あるいは制度として、クリスマスの果たした役割は小さくない。ドイツの家族史についての記念碑的著作『ドイツの家族』*Die deutsche Familie* (1974) を著したヴェーバー＝ケラーマンは、最終章（第6章）の補論「ドイツ市民家族とクリスマスにおける彼らの行動様式」*Die deutsche Bürgerfamilie und ihre weihnachtlichen Verhaltensmuster* において、そのことを明確に指摘している。

小家族圏の閉ざされた扉の向こう側でクリスマスツリーに明かりをともすこと、これは、19世紀のブルジョワの家族生活の特徴である親密さの要求と外的なものの拒否に、ぴったり合っていた。このセレモニーの中心にあるのは、ほとんど典礼といった感じのする優雅な祭りのプログラムである。これは今日でも多くの家庭で通用している。つまり、親たちがたくさんの伝統的な小道具（緑の枝と明かり、合唱と合同の遊戯、贈り物、一緒に飲み食いすること）を活用し、長時間準備して、家族的な内的調和のタペを作りあげる。それによってすべての葛藤を和らげ、ひとときだけでも聖なる世界のユートピアを魔法で呼び出そうとしたのだろうか。

こうして、クリスマスツリーのしたで祝う市民家族の聖夜は、さまざまな行動規範を神聖化し、促進し、あるいはまたタブー化することによって、家父長的家族理想の安定に奉仕する制度となった。²

ヴェーバー＝ケラーマンが社会史の研究を通して確認した事実は、19世紀のドイツ児童文学とクリスマスの関連を追うことでも跡付けられる。そもそもドイツ児童文学の始まり

は近代市民家族の成立と軌を一にする。³ 子どもの教育への関心が高まり、子ども向けの書籍や雑誌の需要を見込んだ作家や出版者にとって、「クリスマスツリーとプレゼントを伴う家族のお祝いとしてのクリスマス」⁴ は格好の主題だった。ここで思い出されるのは、いわゆる『グリム童話』の初版が 1812 年のクリスマス直前に出版された事実である。その後の 19 世紀児童文学の多くがクリスマスプレゼントとして売買されたことも忘れてはいけない。⁵

1-2 19 世紀ドイツ語圏のクリスマス文学の変遷

19 世紀のドイツ文学に描かれた家族をめぐるクリスマスの変遷は、ホフマン『くるみ割り人形とネズミの王様』*Nußknacker und Mausekönig* (1816) からシュティフター『水晶』*Bergkristall* (1853) を経て、ザッパー『プフェフリング家』*Die Familie Pfäffling* (1907) に至る流れを追うことで、おおよそ概観することができるだろう。

『くるみ割り人形』の冒頭に描かれるクリスマスイブは、上流家庭のそれである。

医学参事官シュタールバウム家の子どもたちにとって、12 月 24 日は 1 日中、居間に入っただけとはいかない日だった。そのとなりの豪華な部屋なんでもってのほかだった。フリッツとマリーは、奥の小部屋の隅っこにうずくまっていた。すっかり日も暮れてしまっていた。⁶

クリスマスイブの午後、フリッツとマリーの兄妹を含む 3 人の子を居間から閉め出した両親は、クリスマスツリーの飾り付けに従事する。クリスマスツリーを飾る風習は、17 世紀から 18 世紀にかけてプロテスタント系の諸都市で広まったのち、19 世紀を通してドイツ語圏全土に普及した。⁷ その際、くるみ割り人形で名高いエルツ山地の木工品やガラス玉などが、ツリー飾りとして人気を博すようになる。⁸ また、ツリーにリンゴやお菓子を飾るだけでなく、ろうそくを灯す習慣は、貴族や富裕層などの上流階級に由来するといわれている。⁹ シュタールバウム家もそのひとつに属するのだろう。飾り付けを終えた両親は、ようやく子どもたちを居間に招き入れる。

その時、リンリン、リンリン、と明るい音が響いた。両方のドアがぱっと開くと、部屋全体から光があふれ出た。

「うわあ！　すごい！」と叫んだ子どもたちは、敷居に立って見とれた。パパとママが入ってくると、子どもたちの手をつかんで言った。

「さあ、入って、入って。イエスさまが何をくれたか、見てごらん」[中略]
部屋の真ん中の大きなモミの木には、金や銀のリンゴがたくさん飾られていた。砂糖をふりかけたアーモンドやカラフルなキャンディー、他にもいろいろなお菓子が、つ

ぼみや花のように枝から出ている。暗い小枝の中からは、無数の小さな明かりが星のように輝いている。それがこの魔法の木で一番きれいなものだった。モミの木は、光を吸い込んだり吐き出したりしながら、親しげに子どもたちに枝の花や実を取るよう、誘っていた。(8-9)

クリスマスツリー同様、北ドイツ、プロイセンの人であるホフマンにとっては自明のことだったと思われるが、クリスマスイブに「イエスさま」からプレゼントが贈られるという教えもまた、プロテスタント地域に発祥したのち、19世紀を通してカトリックの南ドイツ・オーストリアまで広まった。それ以前は12月6日の聖ニコラウスの日に、子は聖人からプレゼントを受け取るのが常だった(ただしカトリック地域では、19世紀以降も聖ニコラウスは存続した)。¹⁰

論者が「イエスさま」と訳した語の原語は、*der Heilige Christ*、直訳すると「聖なるキリスト」である。ホフマンの『くるみ割り人形』では *der (liebe) Heilige Christ* と記されていたプレゼントの贈り主は、シュティフターの『水晶』では *das heilige Christkindlein*、すなわち *Christ* のあと、「子ども」を意味する中性名詞 *Kind* に縮小語尾 *-lein* が付されて記されるようになる。もっとも、子どもが子どもに贈り物をするのではなく、キリストキントラインあるいはキリストキンドル *Christkindl* には、別のイメージが重ねられた。

最初は幼子イエスのイメージだったキリストキンドルだが、時が経つにつれ、天使のような姿に変わっていった。白い衣装にヴェールや宝冠を身に着け、金の翼がある。杖を持っていることも多い。家に入るときは煙突ではなく窓からで、プレゼントを持ってくると、ベルを鳴らす。¹¹

『水晶』の舞台はオーストリアの山間部、そして初出時(1845)のタイトルが「聖夜」*Der heilige Abend* であったように、物語はクリスマスイブに展開される。19世紀初頭に北方のホフマンの描いたクリスマスの風習が、世紀の半ばには南方のカトリック圏にまで普及していた事実は、小説冒頭の以下の描写から読み取れる。

子どもたちに贈り物をする習わしの贈り物は、聖なる幼児キリストが子どもたちを喜ばせるために持って来たものだった。この習わしは普通、クリスマスイブの夕暮れが深まった頃に行われた。たいていの場合、その時にはたくさんの明かりが灯された。明かりは小さなろうそくの火であることが多かった。部屋の真ん中にモミやトウヒの木が立てられ、その美しい緑の枝の上で、ろうそくの火は揺らめいていた。子どもらは、聖なるキリストがやって来て、プレゼントを置いていってくれたと合図されるまで、部屋に入ってはいけなかった。やがて扉が開けられ、子どもたちの入室が許可さ

れる。するとみごとにきらめくろうそくの光の中、いろいろなものがクリスマスツリーにぶら下がっていたり、テーブルの上にぐるりと並べられているのを目にするのだった。¹²

この小説に登場する家族は、村の靴屋の職人とその妻、そして幼い兄妹である。女中や下男の影は薄い。クリスマスイブの日、ふたりだけで谷の向こうの母方の祖父母を訪れた兄妹は、帰り道で遭難する。一夜を山で過ごすふたりに教会のミサの鐘の音は聞こえない。その代わり、氷の割ける音を耳にしたのち、彼らは不思議な体験をする。すなわち見上げる星空に「ひとつのおぼろげな光が花咲くように現れて広がり」、「ゆるやかな弧を描いた」。そしてその光の弧は次第に明るさを増し、「緑色に輝きながら、静かに、しかし力強く星々のあいだを流れ」、「弧の一番高いところには王冠の波状の飾りのような、さまざまに輝く光の束が現れ燃えた」。さらにその光の束が「静かに火花を散らせ、かすかに瞬きながら、夜空を貫いて進んで」行くのを、兄妹は目撃するのである(244)。

夜が明けると兄妹は救出される。そして一日遅れのプレゼントを受け取る。その直前、母の腕の中、下の娘は「昨夜の夜、山の上で座っていた時、幼子イエスさまを見たの」(254)と告白する。

少女の見た「幼子イエスさま」は、天空に現れて弧を描いた光の束と考えて問題ないだろう。この光を見たのち、夜が明けると兄妹の命は救われ、家族とふたりの救出に携わった共同体の結束は強められる。シュティフターは後年に発表したエッセイ「クリスマス」Weihnacht (1866)でも、幼子キリストが輝く小型の馬車に乗り、夜空をすばやく駆ける姿を、光ないしは輝きとして描写している。¹³

それから約半世紀を経て発表されたザッパー『プフェフリング家』のクリスマス描写には、こういった神秘性は見られない。表題主人公である一家の構成員は、音楽学校教師の父と専業主婦の母、4男3女の子どもたち、さらに住み込みのお手伝いの計10名である。シュタールバウム家のような上流階級でもなく、山村の職人一家でもなく、都市に暮らす中流の教養市民層が主人公に設定されている点に留意したい。小家族とは言い難いほどの子たくさんであることはさておき、この家族が19世紀型市民家族の生き残りであることを示す証左として、昔ながらのクリスマスツリーへのこだわりが挙げられる。

よその家には、雪とつららでもっと美しく飾られたモミの木もあった。[中略]プフェフリング家のクリスマスツリーはそうではなかった。30年前にプフェフリングのおじいさんやヴェーデキント[引用者注：母の旧姓]のおばあさんが飾ってくれたものとほとんど同じだった。クリスマスツリーは子どもの頃の幸せな思い出と結びついているので、両親ともそれを変える気はなかった。¹⁴

それでも時は 20 世紀に入り、クリスマスに対する人々の思いの変化は随所に垣間見られる。一家の子どもで学齢に達していないのは末っ子だけ、上の 3 人はギムナジウムに通うほど大きいため、彼らが幼子キリストについて話題にすることはほとんどない。プフェフリング夫人の「よその人がクリスマスの喜びを家の中まで運んでくることはできません。それができるのは母親だけなんです」(73) という発言からは、本人にその意図がないにせよ、クリスマスから宗教性を除去し、家族のお祝いとして再定義しようとする態度が見て取ることができる。こうして迎えたクリスマスイブは以下のように描写される。伝統を重視する一家の子どもらがクリスマスツリーを取り囲む様子は、ホフマンやシュティフターの場合とそう大差ない。

まもなくするとクリスマスツリーに明かりが灯され、大きなろうそくの発する銀色の光がテーブルを照らした。人形の部屋と台所には小さな明かりが灯される。合図の鐘とともに扉が開いた！ 子どもたち全員が部屋に飛び込んできた。そのうしろにはヴァルブルク [引用者注：住み込みのお手伝い] もいる。まずはクリスマスツリーに歓声を上げた子どもたちは、ずっとツリーに見とれていた。厳かな気分が満ち足りて、うれしそうに顔が輝いている。それからプレゼントに目を向けた。(75-76)

しかし『プフェフリング家』では、クリスマスツリーのもと、子から親へもプレゼントが贈られる。それらは自作の詩や絵であったり、演説や歌の披露であったり、「火起こしになるもの」(34) を集めた袋であったりする。このような親子間のプレゼントの交換を通してやり取りされるのは、近代市民家族の情緒的な結びつき以外の何物でもない。彼らは 19 世紀に「作られた」クリスマスの伝統を守りながら、図らずもその世俗化・脱宗教化にも貢献しているのである。

オットーの演説に続き、子どもたちは次々と両親を驚かせるプレゼントを披露した。
[中略] 両親はどのプレゼントにも大喜びしたから大成功だった。ふたりは 7 人の子どもたちを自慢に思った。(77)

ここまで、19 世紀ドイツ語圏のクリスマス文学の展開を概観していえることは、ろうそくの灯されたクリスマスツリーのもとで子どもにプレゼントを贈る風習が、北のプロテスタント地域から南のカトリック地域へと伝播し、あらゆる社会階層にまで普及した事実である。もっとも、その過程でプレゼントの贈り主である幼子キリストは姿を消し、親子間のプレゼント交換へと変化している。

次章以降では、近代化のテンポのより速まった 20 世紀、第一次世界大戦の敗戦と帝国の崩壊を経て、「黄金の 20 年代」と世界恐慌を体験したのちの 1933 年に発表されたふたつの

クリスマス児童文学について考察する。具体的には、『飛ぶ教室』を手がかりにプレゼント交換の多様化と幼子キリストの復活について、『おもちゃ屋のクリック』からは、幼子キリストに代わる贈り主の登場と家庭の外のクリスマスツリーの役割について、詳細に検討したい。

2 ケストナー『飛ぶ教室』

親元を離れ、南ドイツのギムナジウムの寄宿学校に暮らす13歳から14歳の少年たちの友情を、クリスマスを背景に描くこの小説のあらすじは、改めて紹介するまでもないだろう。クリスマス休暇の直前、誰もが期待することは同じはずである。したがって語り手は以下の描写の主語に、不特定多数を表す不定代名詞 *man* を用いている。

1年でもっとも美しい夜、クリスマスイブまであと数日という日の晩だった。家々のどの窓を見上げて、もうすぐこれらの窓から、クリスマスツリーのろうそくの明かりが暗い通りを照らし出すのだろう、と思わずにはいられなかった。その頃には両親といっしょに、我が家のクリスマスツリーのもとにいるはずだ。¹⁵

にもかかわらず、クリスマスイブに帰省できない少年が生じてしまう矛盾や不条理を告発した文学として、論者は『飛ぶ教室』を読んでみたい。そのことを論証すべく、まずはこの小説に描かれた、さまざまなクリスマスプレゼントについて見てみよう。

2-1 クリスマスプレゼントの脱ロマン化

ギムナジウムの授業が12月23日に終わると、クリスマスイブには多くの生徒が列車に乗って帰省する。鉄道網の普及によって実現したこの現象は、19世紀後半から20世紀にかけて、工業化されたヨーロッパ各地で見られたものと思われる。

クリスマスが仲間との集いと家族の再会の時として発展した主因は、19世紀に安価な鉄道旅行が普及したことである。それ以前の冬の貧弱な道路事情のもとでは、旅行はめったに行なわれず、費用がかかり、短いクリスマス休暇を過ごすにはあまりに時間がかかった。しかし鉄道時代の到来後、イギリスの貧しい人々は休暇旅行を楽しむに待つことができるようになった。[中略] また、鉄道網のおかげで、何千人もの寄宿学校生がクリスマスに帰省できるようになった。¹⁶

『飛ぶ教室』の生徒たち、とりわけ最上級生は、故郷で両親とプレゼントを交換する前に、駅で女子校生とクリスマスプレゼントの交換を行っている。

9年生はダンスの授業のパートナーの女の子たちとホームを散歩しながら、世慣れた大人みたいにおしゃべりしていた。お互いに花束やレープクーヘンを贈り合っている。美青年ぶったテーオドールは、[中略]本物と見まがうようなシガレットケースをもらい、他の9年生たちに自慢げに見せびらかした。(142)

寄宿学校での共同生活を疑似家族と見なす『飛ぶ教室』では、信頼する舎監の教師と生徒のあいだでもプレゼントが交換される。生徒らは舎監のベク先生に、先生の旧友「禁煙さん」との再会をプレゼントする。他方、先生は満足な仕送りが受けられず帰省できないマルティンに対し、旅費すなわち現金を手渡す。

「旅費は私からのクリスマスプレゼントだ。返すことはない」(145)

こうしてマルティンも他の生徒同様、列車で帰省することができる。その際、彼は前日に母から届いたクリスマスプレゼントの入った小包を、開封せずに持ち帰る。しかしそのことを友人のジョニーには言わない。なぜならマルティンは孤児のジョニーがクリスマスも学校に残らざるを得ないことを知っているからである。

クリスマスプレゼントを持ち帰るなんて、ジョニーには言えなかった。ヘルムスドルフの自宅のクリスマスツリーの下で見つけるはずのプレゼントを、キルヒベルクの学校から持ち帰るなんて、マルティンは言えなかった。(148)

マルティンは先生から受け取った20マルクを元手に両親にプレゼントを買って帰る。父親にはハバナ産の葉巻を25本、母親には暖かそうなスリッパを購入する。

お母さんのラクダの毛のスリッパは、もう捨ててもいいくらい、じゅうぶん古びていた。けどお母さんはいつも「あと10年は大丈夫」と言っていた。(148)

子から親へのクリスマスプレゼントにスリッパという生活必需品が含まれている点は、次章で取り上げる作品との関連で改めて検討したい。マルティンは先生から現金を受け取る前、両親に宛てて絵を送っていた。当初はこれが唯一のクリスマスプレゼントだった。

今年はお母さんとお父さんに何もプレゼントできないけど、お母さんならわかってくれるよね。来年はきっと新1年生の家庭教師をやって、僕もお金を稼ぐよ。(129)

父の失業によってひとり息子を帰省させる金を用意できなかった両親は、クリスマスイブの晩、マルティンから送られた絵をありがたがる。そしてふたりでクリスマスを祝う。しかしそこには、近代市民家族の結束を謳ったはずのクリスマスの喜びはない。

ターラー夫人は裁縫台から、6 頭立ての青い馬車の絵を取り出し、小さなクリスマスツリーの下に慎重に立てかけた。[中略]

それからふたりはふたたび黙り込み、「10 年後」というタイトルの絵をじっと見つめながら、幼い画家のことを考えた。[中略]

「なあ、お前。今年はお互いにプレゼントは贈り合えんが、それでもお祝いだけはしっかりやろう」ターラーさんは奥さんの頬にキスをした。「クリスマスおめでとう」

「クリスマスおめでとう」夫人も応えた。そして泣いた。まるで2度と泣き止むことができないような泣き声だった。(151-152)

マルティンの友人には、両親から望み通りのプレゼントを受け取ることのできる裕福な家庭の子もいる。また、上に引用した場面の直後、マルティンは葉巻とスリッパのプレゼントを手に両親の前に現れる。にもかかわらず、この小説に描かれるクリスマスプレゼントの交換には、近代市民家族の情緒的な結びつきを確認する要素が少ないように思われる。それはプレゼント交換の対象が、教師や生徒間にまで拡大されていると同時に、クリスマスに家族が集うことの困難な、郵便でプレゼントを贈り合わざるを得ない貧困家庭が物語の中心に据えられているためでもあるだろう。さらにジョニーのように、両親のいない子のクリスマスまでもが描かれている。19世紀のクリスマス文学には、富める家族と貧しい家族の二極化がこれほど明確に描かれることはなかった。もはや満ち足りた市民の自己演出という理解では捉えきれない現実が、1933年のクリスマスには存在したのである。論者はここに近代市民家族の限界を見出すのである。

そもそもギムナジウムの寄宿学校で共同生活を送る疑似家族に、母親は存在しない。舎監の教師と男子生徒が父と息子の関係を築けたとしても、それで家族が埋め合わされるわけではない。そのことに関連し、マルティンやジョニーらは、学校のクリスマス祭で「飛ぶ教室」という劇を上演する。その劇で女装し、生徒の「妹」役を演じるはずだった友人が怪我で出演できなくなると、彼らは急ぎよ下級生に代役を依頼する。そうして何とか事なきを得るのだが、このエピソードが象徴しているのは、19世紀のクリスマス文学では多用された兄妹モチーフ成立の困難であり、母や妹の存在を自明視してきた近代市民家族の相対化あるいは揺らぎだろう。

『飛ぶ教室』の中心的人物マルティン・ターラーの家庭は、家長の失業とひとり息子の不在によって不安定な状態にあった。それを救ったのは、疑似家族の代理父である舎監の教師から施された20マルク、すなわち金の力だった。1933年のクリスマス文学に描かれ

たプレゼント交換は、家族を離れて多様化された挙句、即物的に現金として手渡されるまでに脱ロマン化されてしまったものと考えられる。

2-2 幼子キリストの理想と現実

クリスマスイブの夜、節約のために居間の明かりを灯さないターラー家の家長は、隣家のクリスマスの様子を見て、次のように述べる。

「ノイマンさんのところは、もうプレゼント交換をしているぞ」ターラーさんは言った。「お、ミルデさんとは、いまろうそくに火をつけた。立派なクリスマスツリーだ。あのうちは儲かっているからな」(149)

他方、ターラー家のクリスマスツリーは対照的にみすぼらしい。

丸いテーブルには、本当に小さなトウヒが立てられていた。クリスマス市でツリーを売っているリーデルさんが、「マルティンに」と言ってプレゼントしてくれたものだった。だから、ターラー家にもクリスマスツリーはあるにはあったが、肝心の息子が家にはいなかった！(150)

家長はこのツリーに去年の残りのろうそくを飾り付ける。そして火をともし、妻と「クリスマスおめでとう」を言い合う。ここでもまた、隣家の家族打ち揃ったクリスマスの団欒と、夫妻ふたりしかいないターラー家の様子が対比して描かれている。

ろうそくはだんだん小さくなっていった。となりの家からは「きよしこの夜」の歌声が聞こえてきた。窓の外はずっと吹雪いていた。

急に呼び鈴が鳴った！(152)

立派なクリスマスツリーのもとでプレゼントを交換し合い、「きよしこの夜」を歌う旧来のクリスマスを窓外に配置した上で『飛ぶ教室』が描くのは、そういった19世紀型のクリスマスを迎えられない、もはやクリスマスが家族の祝祭になり得ない貧困家庭の現実である。とはいえケストナーは、ターラー家のクリスマスの不成立を露悪的に描くことで、近代市民家族の崩壊を宣言して物語を終えるわけではない。マルティンの鳴らす「呼び鈴」を引き金に、20世紀的なアレンジの施されたクリスマス文学を提示している。

19世紀のクリスマス文学では、クリスマスイブの夕刻、子どもらは何らかの合図を得てはじめてクリスマスツリーのある部屋への入室を許可された。『くるみ割り人形』のリンリンという「明るい音」や『プフェフリング家』の「鐘」がそれに相当する。マルティンの

鳴らす「呼び鈴」も同種のものと考えられる。また、これらの音は、幼子キリストが贈り物を携えて家庭にやってきたことを告げる合図でもあった。したがってマルティンの帰郷は、幼子キリストの来訪と読み替えることができる。事実、マルティンは母から送られた小包を、クリスマスプレゼントの入った小包を手に戸外に立っている。

その関連において、マルティンが登場する直前、隣家から聞こえるクリスマスソングが「きよしこの夜」であることの意味は大きい。わが国で名高い由木康（1896-1985）の訳詞では、「救いの御子」が「馬槽の中に」眠る様子しか言及されないのに対し、ヨーゼフ・モア（Joseph Mohr, 1792-1848）のドイツ語の原詩（1818）には、ひと組の仲睦まじい聖なる男女が生まれたばかりの巻き毛の愛おしい男児を見守る様子、すなわちヨゼフとマリアとイエスから成る聖家族の成立が描かれている。そのことを念頭に置くと、背景音楽に「きよしこの夜」が流れる中、ひとり息子のマルティンを帰郷させる演出には、ターラー家を聖家族として描く意図が隠されているものと考えられる。もっともケストナーは、マルティンを幼子キリストに見立てることで、宗教的あるいは復古的なクリスマス文学の再生をもくろんだわけではない。

すでに述べた通り、幼子キリストのイメージは時が経つにつれ、翼のある天使の姿に変わっていった。『飛ぶ教室』にも翼のある天使が登場している。両親との再会を果たしたマルティンは、恩人のベク先生に宛ててハガキをしたためる。

マルティンは若い男の絵を描いた。ジャケットのうしろに大きな天使の翼を2本はやしたこの奇妙な男は、雲のあいだから降りてきている。地上では小さな男の子が大粒の涙をこぼしている。翼の男は両手でつかんだ分厚い財布を男の子に差し出していた。

[中略] マルティンは絵の下にしっかりと書き入れた。

「クリスマスの天使、名前はベク」(153-154)

ベク先生がマルティンに贈ったのは、20 マルク紙幣1枚だった。この金で少年は往復の旅費を賄い、両親にプレゼントを用意することができた。そしてターラー家の幼子キリストになることができた。その背後に、いわば大天使として、ベクという名の「クリスマスの天使」が控えている構図は、たいへん夢のある絵のように思われる。理想主義者ケストナーの面目躍如とっていいだろう。ただしその天使が札束の詰まった「分厚い財布」から現金を抜き取り、幼子キリストである「男の子」に差し出しているさまは、イデアリストであると同時にリアリストでもあるケストナーの皮肉と解することもできるのではないだろうか。ケストナーのクリスマス文学を単に保守的復古的あるいは理想主義的なものとして片づけられないのは、こういった深い現実認識に裏打ちされているからなのである。

次節では『おもちゃ屋のクリック』のクリスマス描写を分析する。『飛ぶ教室』のギムナジウム生より、さらに貧困層に位置づけられる少年少女のクリスマスには、幼子キリスト

が現れることもなければ、家にクリスマスツリーがない場合すらある。19世紀のクリスマス文学には描かれなかった、不況下のドイツの子どものクリスマスについて考察したい。

3 シュナック『おもちゃ屋のクリック』

『おもちゃ屋のクリック』の舞台はドレスデン、偶然だがケストナーの故郷である。表題主人公のクリックは12歳の少年で、父はおもちゃ屋で簿記係をしている。母親はすでに他界している。母がいた頃のクリスマスを、クリックは次のように回想する。

「お母さんがまだ生きていた頃は」クリックは言った。「いい時代だった。楽しいクリスマスイブだった。大きなツリーにお菓子、プレゼントもいっぱいあったよ。けどもう無理なんだろうね。物価は高いし、お金はない。失業者だらけだもんね」¹⁷

物語はクリスマスイブにクリックが宝くじを買うところから始まる。そして買ったくじを帽子の裏の裂け目に入れて保管する。ところがこの日の夕刻、クリックはその帽子をなくしてしまう。

帽子のないクリックの頭のまわりを雪が吹きつけた。髪が乱れた。電飾に火が灯され、通りはこうこうと輝いていた。家々の壁は紫や赤、緑のネオンで輝いていた。色鮮やかな文字がピカピカ光ったり消えたりしていた。吹雪にも赤、緑、青、紫といった色が付いていた。魔法の雪がざわめく冬の街に舞い落ちているようだった。だけどその賑わいに溶け込めず、冷めた気持ちでクリックとアリ〔引用者注：クリックの友人〕は立ち尽くしていた。(39)

その後、クリックの買ったくじは2万マルクの当たり券であることが判明する。懸命の捜索の結果、夏になってようやくクリックの帽子が見つかる。その金で彼は失業寸前の父を助けることができる。

『おもちゃ屋のクリック』は、クリスマスイブから始まるものの、翌年の夏までの筋が展開されているため、必ずしもクリスマスだけを描いた小説ではない。しかし論者はこの小説と『飛ぶ教室』を並べて論じることで、20世紀前半のドイツの家族とクリスマスの関係を、より多角的に指摘することができると考えている。したがって以下、『おもちゃ屋のクリック』のクリスマス場面にも注目し、分析を試みたい。

3-1 威厳をなくしたサンタクロース

クリックがなくした帽子は、かつて母親が買ってくれたものだった。帽子の紛失に象徴

される母の不在は、この日、すなわちクリスマスイブの家族の過ごし方に、より端的に表れている。

クリックは7時10分前に家に着いた。お父さんが仕事から帰ってくるまでに、急いでクリスマスツリーを飾らなければいけなかった。

お父さんにクリスマスの用意をしてあげなきゃ！ [中略] いい子になって、クリスマスツリーを飾ってあげるんだ。世の中のお父さんは、クリスマスには子どもの気持ちになるはずだ。クリスマスの気分浸りながら、クリックは「いざ歌え、いざ祝え」を鼻歌で歌った。(51-52)

この場面にも垣間見られるクリックの大人びた態度、あるいは父への気遣いは、小説全体を通して一貫している。「父親のツリー」を準備したひとり息子は、父が帰宅すると食卓の準備に取り掛かる。あいにく今年は貴重なクリスマスの鯉はなく、¹⁸ 安価なニシンのフライがメインディッシュである。

クリックは食卓を整えた。彼は母親であると同時に家政婦だった。(54)

クリックが母と息子の1人2役をこなす状況下、聖家族の成立はいっそう困難になる。もはや彼がマルティンのように幼子キリストになることはない。ところが食後に父子がプレゼント交換を行う段になると、これまでのクリスマス文学には見られなかった事態が生じる。

「さて！」ボーデンヴェーバー氏 [引用者注：クリックの父] は立ち上がりながら言った。「少し部屋から出ていなさい！」

毎年、クリスマスイブはそうだった。食事が終わると父親はサンタクロースに変身するのだ。パイプを持ったクリスマスの天使に。彼はクリスマスツリーのろうそくに火をつけ、プレゼントを並べた。 [中略]

ろうそくの火は明るく燃えていた。ボーデンヴェーバー氏はガラスの鐘を鳴らした。クリスマスの天使のような音色がした。クリックは部屋に入り、静かに扉を閉めた。そして期待に胸を膨らませながら、まだ部屋の中を漂っているはずのクリスマスの天使を、物音でびっくりさせないように、少しずつツリーに近づいた。(55-56)

「サンタクロース」と訳した語の原語は **Weihnachtsmann** である。直訳すると「クリスマス男」を意味するこの存在は、アメリカ発のサンタクロース **Santa Claus** とは出自がやや異なる。1847年にオーストリアの画家モーリッツ・フォン・シュヴィント (Moritz von Schwind,

1804-1871) は、「ひげの男がフードの付いたコートを着て、ロウソクを灯したクリスマスツリーをかついでいる絵」¹⁹ を初めて描いた。それに由来するヴァイナハツマン、すなわちドイツ版サンタクロースは、19世紀後半から20世紀にかけて、幼子キリストに代わるクリスマスプレゼントの贈り主として、ドイツ語圏に浸透した。1932年時点の分布図によると、南西ドイツでは幼子キリストが勢力を維持しているのに対し、ドレスデンを含む北東ドイツには新興のサンタクロースが進出している。²⁰ この棲み分けはカトリックとプロテスタントの勢力圏とほぼ一致する。

あるいはサンタクロースの登場を聖ニコラウスの世俗化と捉えることもできるだろう。²¹ 12月6日に従者ループレヒトとともに現れ、よい子には褒美を、悪い子には罰を与える聖ニコラウスは、幼子キリストをクリスマスプレゼントの贈り主とする風習がプロテスタント地域から全ドイツ語圏に広まってもなお、とくに南ドイツ・オーストリアでは生き長らえた。それがいまや姿を変え、クリスマスイブの夜にある種の父親的人物として、近代市民家族に現れるに至ったのである。19世紀半ば以降のサンタクロースの登場とその受容現象について、ヴェーバー＝ケラーマンは次のように分析している。

中部、北部ドイツのほとんどの地域で、その役目〔引用者注：クリスマスプレゼントを贈る役目〕を引き受けたのは、サンタクロースである。ここでは、家父長的家族構造が父親とおぼしき匿名者に委託され、彼は——少なくとも12月という月には——通常の父親に可能な範囲をはるかにこえる教育的統制機能を、子ども部屋で発揮できる。つまり、一九世紀の産物であるサンタクロースは、一九世紀市民家族に内在的な発想、というわけである。²²

19世紀に成立・展開した近代市民家族において、家長である父は家の外に仕事を持ったことはすでに述べた通りである。その結果、母子の密着は強まる一方、子にとって父は親愛と同時に外的な権威を兼ね備えた人物として受け止められた。サンタクロースはそういった父親の機能を純化した存在といえるだろう。

サンタクロースの社会的機能は、愛されると同時に権威主義的でもある父親像と合致する。サンタクロースが誕生した時代、父親の稼ぎから性的な事柄に至るまで、家の外の世界はタブー視された。市民の子は、クリスマスプレゼントの本当の贈り主が誰なのか、それがいくらするのかなどについて、知らないことが美徳とされた。²³

このことを前提に、『おもちゃ屋のクリック』に登場する1933年のサンタクロースが「過剰に高められた父親像、善良にして厳格で、愛されるとともに恐れられ、揺るぎない公正さと非のうちどころのない判断力を持った」²⁴ 存在として息子の前に君臨しているかとい

うと、まったくそうではない。そもそもクリックは、サンタクロースの正体が父であることを承知した上で、この儀式に付き合っている。²⁵ 亡母に代わり家事を取り仕切るクリックは、当然のことながら父の会社の経営危機をじゅうぶんに把握している。したがって彼はサンタクロースに変身する直前の父親に対し、次のような言葉をかけている。

「ねえ、お父さん！」クリックはパイプを吸う父親の肩を叩きながら言った。

「お仕事のことは考えないで。今日はクリスマスなんだから。休暇が終わるまでは放っておこうよ。くよくよ考えてみたところで、よくなりはないんだから」(55)

あたかも妻から夫への励ましのように聞こえるクリックの発言に、父親の稼ぎをタブー視する息子の態度は感じられない。こうしてクリックもまた『飛ぶ教室』のマルティン同様、家計の窮状に意識的な、もっといって金に敏感な少年として、1933年のクリスマスを彩るのである。

クリックがこの後、父あるいはサンタクロースから受け取ったクリスマスプレゼントは、念願の小型ラジオだった。一刻も早くラジオをいじりたいクリックに対し、父は得意のハーモニカで「いざ歌え、いざ祝え」を演奏する。²⁶

他のクリスマスソングと同じく、美しく、厳かなメロディだった。その音色にうっとりした父親は、目を閉じ、音楽と率直な喜びに浸って立っていた。その時、クリックは大きな目で、ラジオをそっと見やっていた。

すぐにスイッチを入れてみよう、と彼は心に決めていた。お父さんのハーモニカが終わりさえすれば！(56-57)

父を慮るクリックが、自らの思いを口にすることで父を傷つけることはない。しかし本音では、前世紀からの伝統に固執する父親に対し、冷めた視線を持ち合わせているのではないか。父ほど無邪気にクリスマスを楽しんでいないのではないか。ハーモニカの奏でる素朴なクリスマスソングよりも、ラジオという20世紀の機械文明を欲する息子の態度は、父親世代との潜在的な対立を表しているように思われる。

他方、クリックから父へのクリスマスプレゼントは、手作りの鳥かごだった。後日にはペットショップからアトリが届く手配も整えられているという。父親はハーモニカで鳥の鳴き声をまねるが、その音色はクリックには聞こえない。

クリックに父の演奏を聴く余裕はなかった。彼は機械の操作に夢中だった。外では雪が激しく降っていた。しかし彼の頭の中を渦巻くのは、いろいろな計画であり、とぎれとぎれに聞こえるラジオの放送であり、未来の音楽だった。他方、父親は現代と

いう鳥かごの中の小鳥だった。静かなメロディを吹いた。父にラジオは必要なかった。彼に聞こえるのは、あらゆる鳥のさえずりであり、アトリの羽ばたく音だった。(59)

現代あるいは現実という鳥かごに入れられ、羽ばたくことのできない父親と、機械を介して別世界とつながることを夢見る息子。19世紀には有効だったクリスマスを通した近代市民家族の結束とサンタクロースによる父権の強化は、わずか100年で機能不全に陥ったといえるだろう。

3-2 誰のものでもないクリスマスツリー

『くるみ割り人形』や『水晶』などの19世紀のクリスマス文学では違和感なく使われていた兄妹モチーフが、『飛ぶ教室』では男子生徒の女装という、ゆがんだ形で表現されていたことは、すでに指摘した通りである。

ひとりっ子のクリックにも、妹のような友人が存在する。通りを隔てた向かいに住む10歳の少女アリである。孤児のアリはミットヴォッホお婆さんと暮らしている。新聞売りで生計を立てるふたりの暮らしぶりはあまりにつつましい。

アリとミットヴォッホお婆さんは、パンとジャガイモとコーヒー、それに明日のお菓子が少しあれば満足だった。せめてクリスマスだけでも、ミットヴォッホお婆さんの新聞が最後の1枚まで、すっかり売り切れますように！ そうなればどんなにうれしいことだろう。(49)

今年のふたりのクリスマスプレゼントの交換は以下のように予告されている。

アリはお婆さんが何をプレゼントしてくれるのか知っていた。靴だった。どうしても靴が必要だった。古いのもうどうやっても直すことができなかった。靴を買うのはたいへんな出費だ。両親が生きていてくれたら！ アリは思った。だけど両親はポーランドに埋葬されていた。ミットヴォッホお婆さんが、何とかアリの面倒を見てくれていた。アリはお婆さんのために手袋を編んだ。(50)

ここで思い出されるのは、『飛ぶ教室』のマルティンが母に贈ったスリッパである。どちらも古びた既存の履物の交換であり、生活必需品といえる。しかしマルティンがこの買い物で懐を痛めることはなかった。なぜなら彼は舎監の教師から贈られた20ユーロを元手に、スリッパを購入することができたからである。その結果、マルティンは母を驚かせ、喜ばせることができた。それに対し、お婆からアリへのプレゼントに驚きはない。それどころか受け手はこの贈り物に遠慮がちである。そもそもアリが幼子キリストやサンタクロース

に思いをはせることはない。日々の生活に追われる彼女にそんな余裕はないのである。

干からびたエリカの花束を載せてある部屋の隅の棚から小銭を取ると、アリはパン屋へ急いだ。ガチョウの胸肉やソーセージ、美味しそうなものそばはさっと通り過ぎた。クリスマスのお祝いの日だって、彼女はそういったものを1切れだって食べることはできないだろう。(48)

クリスマスイブにパンしか買えない少女の貧しさは、親の仕送りや教師からの施しによって帰省できる『飛ぶ教室』の少年たちの幸運と比較することはできない。どれほどアリがおもちゃ屋のショーウィンドウを見つめたところで、人形に話しかけられることはない。²⁷

薄い服を通して寒さが身にしみた。アリは震えながら自分の貧しさを感じた。大きな目をした人形たちは、アリに微笑みかけていた。彼女は真剣な表情で見つめ返した。それ以上、何も起こらなかった。両者のあいだは冷たいガラスで隔てられていた。(51)

作中には明記されていないものの、アリとミットヴォッホ夫人の住まいにクリスマスツリーはないものと思われる。したがってアリの目にするクリスマスツリーは、クリックと訪れたデパートにあるものだけだろう。

巨大なクリスマスツリー——これが多彩なデパートの中で、もっとも魅力的なものだった——が、最上階の天井に届きそうなくらいそびえていた。エルツ山地のモミの木はガラス製のろうそくで電飾されていた。頂上には大きな銀の星が輝いていた。枝には満月のような銀色のガラス球が飾られ、銀モールも垂れ下がってあった。美しく装飾されたクリスマスツリーは、見事にきらめいていた。(38)

19世紀の終わりにアメリカのエジソン社が発明したクリスマスツリーの電飾は、20世紀に入りヨーロッパ大陸にも伝わった。その後の展開については、以下の記述を参考にされたい。

ドイツやアメリカでは、教会のホール、日曜学校、孤児院、病院など公共施設の屋内にツリーが飾られてきた。だがそれは、中流家庭の楽しみを、自分ではそれを手に入れられない不幸な人々にも分け与えようという発想のものだった。²⁸

19世紀のクリスマスツリーは、家長である父がろうそくに火を灯すことで、近代市民家族という親密圏に属する者同士の結束や排他性を確認するために欠かすことのできない道具

として機能した。²⁹ 他方、人工光によって常時輝く公共のクリスマスツリーにそういった思想はない。自宅にクリスマスツリーがない者のためのクリスマスツリー、誰のものでもあるクリスマスツリーとは、けっきょくのところ誰のものでもないのではないか。その証拠に、アリはデパートの電飾のクリスマスツリーに感動することはなく、むしろ家庭のろうそくのクリスマスツリーにあこがれている。

まもなくそれぞれの家庭のクリスマスツリーに火が灯されるだろう。それはデパートのクリスマスツリーより、きれいに違いなかった。ろうそくの燃えるいい香りがする。テーブルにはプレゼントが用意される。うれしそうな子どもらの目が、プレゼントに注がれる。だけどもっと多くの子どもたちは、プレゼントなんてもらえない。彼らにあるのはただ憧れだけ。アリはそう思った。(49)

ところで電飾のクリスマスツリーは『飛ぶ教室』のギムナジウムにも置かれている。

大きなクリスマスツリーは、数えきれないくらいたくさんの電球で美しく飾られていて、そこにいる人全員、厳かな気持ちになった。(136)

デパートのクリスマスツリー同様の紋切り型の描写に、それぞれの家庭のクリスマスツリーにはあるはずの物語性は感じられない。ギムナジウムの生徒にとって、学校のクリスマスツリーが我が家のクリスマスツリーを上回ることはないだろう。孤児のジョニーも学校のクリスマスツリーに思いを寄せることなど、ないものと思われる。家庭を離れ、孤独にそびえ立つ公共のクリスマスツリーの存在感は、限りなく薄いのである。

4 真夏のクリスマス

ここまで、1933年に発表されたふたつのドイツ児童文学作品をもとに、20世紀のクリスマス表象について確認してきた。『飛ぶ教室』では、プレゼント交換は多様化された果てに現金化され、クリスマスの天使は札入れを持って登場していた。『おもちゃ屋のクリック』に現れるサンタクロースに威厳はなく、公共の電飾のクリスマスツリーに胸躍らせる者は誰もいなかった。19世紀に「作られた」クリスマスの伝統は、皮肉ないしは風刺を効かせて書き換えられることで、近代市民家族の限界を象徴する機能を新たに担わされたのである。³⁰

ところで『飛ぶ教室』と『おもちゃ屋のクリック』のクリスマス描写には、さらにもうひとつの共通点が存在する。すでに述べた通り、『おもちゃ屋のクリック』の主筋は表題主人公の買った2万マルクの当たりくじをめぐって展開された。クリックがクリスマスイブ

に買ったものの、すぐに紛失したそのくじは、翌年の夏になってようやく見つかる。するとクリックは、父とアリの3人で買い物に出かける。

真夏のクリスマスだった。

彼らは楽しそうに通りを歩いて、店から店へとはしごした。最初に父親とクリックの服を買った。靴も靴下もピカピカの新品ばかりだった。アリも服を買ってもらった。淡い黄色の、小さなバラの模様の付いたワンピースだった。すぐに必要な下着や新しいシャツをデパートで買うと、3人はエスカレーターに乗った。1段ずつ、前後に並んで、喫茶室のあるフロアまで上がった。(190)

当然のことながら、真夏のデパートにクリスマスツリーはない。しかし彼らが買い物をする様子を、語り手が「真夏のクリスマス」と形容している点は注目に値する。兄妹のようなクリックとアリにとって、降って湧いた大金によるこの買い物は、遅れてきたクリスマス、季節はずれのクリスマスなのである。

季節はずれのクリスマスといえ、『飛ぶ教室』の「ひとつ目の前書き」も忘れてはならない。物語の冒頭の外枠部分において、語り手は真夏にクリスマス文学を書くことの苦みを次のように訴えている。

きっとわかってくれると思うけど、真夏のさなかにクリスマス物語を書くのは至難の業だ。腰を据えて取りかかることなんかできっこない。「身を切るような寒さだった。外は猛吹雪で、窓から顔を出したアイゼンマイアー博士の両方の耳たぶはかじかんだ」なんて書けるわけがない。どんなに頑張っても、こんなことを8月に書くのは無理だと思う。(43)

これから語られるマルティンの帰郷も劇中劇「飛ぶ教室」の上演も、すべてが虚構であることを早々に明かしてしまう語り手の名はケストナー。作者と同名の語り手が、クリスマス文学を真夏に執筆しているという舞台裏を暴露することほど、このジャンルの幻想を破壊する禁じ手はないだろう。ここでもまた、真夏とクリスマスという不釣り合いな組み合わせが、意図的に採用されているのである。

にもかかわらず、ケストナーは両親と子から成る小家族のクリスマスを描いた。シュナックもクリックとアリに半年遅れでクリスマスの買い物を体験させた。20マルクと2万マルクの差はあれど、どちらも予期しない金、父の稼ぎではない金が舞い込んで初めて実現したクリスマスだった。もっとも、他人の金でクリスマスを祝ったところで、ターラー家の父の威厳は回復しないだろう。どれだけ大金を積んだところで、クリックの母やアリの両親は戻ってこない。それでも彼らはクリスマスを祝おうとするのである。近代市民家族

が限界に達してもなお、クリスマスの（ろうそくの）灯を守ろうとするのである。家族の形態が変わっても、時の権力者が代わっても、しぶとく生き長らえるクリスマスには、真夏の暑さもまた似つかわしいのかもしれない。

<注>

- ¹ 姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』山川出版社、2008年、47-51頁。
- ² I・ヴェーバー＝ケラーマン『ドイツの家族 古代ゲルマンから現代』鳥光美緒子訳、勁草書房、1991年、241頁。
- ³ Vgl. Heinz Wegehaupt (Hrsg.): *Weihnachten im alten Kinderbuch*. Leipzig (Edition Leipzig) 1992, S. 159.
- ⁴ Wegehaupt: ebd.
- ⁵ その一例として、ヴェーゲハウプトはハインリヒ・ホフマンの『もじゃもじゃペーター』*Struwwelpeter* (1845) を挙げている。Vgl. Wegehaupt: a.a.O., S. 160.
- ⁶ E. T. A. Hoffmann: *Nussknacker und Mausekönig*. Stuttgart (Reclam: Universal-Bibliothek Nr.18503) 2006, S. 5. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。ホフマン『クルミわりとネズミの王さま』上田真而子訳、岩波書店、2000年。
- ⁷ Ingeborg Weber-Kellermann: *Das Weihnachtsfest. Eine Kultur- und Sozialgeschichte der Weihnachtszeit*. München u. Luzern (Bucher) 1978, S. 108ff.
- ⁸ Weber-Kellermann: a.a.O., S. 150ff. およびジュディス・フランダーズ『クリスマスの歴史 祝祭誕生の謎を解く』伊藤はるみ訳、原書房、2018年、168頁参照。
- ⁹ Weber-Kellermann: a.a.O., 109.
- ¹⁰ 若林ひとみ『クリスマスの文化史』白水社、2010年、78頁参照。
- ¹¹ ジェリー・ボウラー『図説 クリスマス百科事典』中尾セツ子（日本語版監修）、柊風舎、2007年、147頁。
- ¹² Adalbert Stifter: Bergkristall. In: A.S.: *Stifters Werke in vier Bänden*. 2. Bd. Berlin u. Weimar (Aufbau) 1973, S. 199-255, hier S. 201f. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。アーダルベルト・シュティフター『シュティフター・コレクション 第二巻 石さまさま（下）』田口義弘ほか訳、松籟社、2006年、9-80頁。
- ¹³ Adalbert Stifter: Weihnacht. In: A.S.: *Die Mappe meines Urgrossvaters. Schilderungen. Berichte*. Vollständige Texte. Nach den Erstdrucken (Wien und die Wiener, Tandelmarkt, Sonnenfinsternis, Menschliches Gut, Winterbriefe aus Kirchschatz) und der Prager Ausgabe (Mappe – vierte Fassung,

Aus Wien, Beiträge zur Gartenlaube, Aus dem Bayerischen Walde, Autobiographische Skizzen, Briefe). Mit einem Nachwort von Fritz Krökel. München (Winkler) 1968, S. 549-557, hier S. 551.

- ¹⁴ Agnes Sapper: *Die Familie Pfäffling*. Altenmünster (Jazzybee-Verlag) 2016, S. 74. これ以降の同作品からの引用には同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。アグネス・ザッパ『愛の一家 あるドイツの冬物語』遠山明子訳、福音館書店、2012年。
- ¹⁵ Erich Kästner: *Das fliegende Klassenzimmer*. Ein Roman für Kinder. In: E.K.: *Werke. Eintritt frei! Kinder die Hälfte! Romane für Kinder II*. Hrsg. v. Franz Josef Görtz in Zusammenarbeit mit Anja Johann. München/Wien (Hanser) 1998. S. 41-159, hier S. 87. これ以降の同作品からの引用には同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。エーリヒ・ケストナー『飛ぶ教室』池田香代子訳、岩波書店、2006年。
- ¹⁶ ボウラー（前掲書）、373-374頁。
- ¹⁷ Friedrich Schnack: *Klick aus dem Spielzeugladen. Roman für das große und kleine Volk*. Frankfurt am Main (Insel) 1988, S. 29f. これ以降の同作品からの引用には同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。なお、訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。シユナック「おもちゃ屋のクリック」、『世界少年少女文学全集 第18巻』大山定一訳、東京創元社、1961年、5-198頁。
- ¹⁸ ドイツやチェコでは、クリスマスに鯉を食べる習慣がある。
- ¹⁹ 若林（前掲書）、七七頁。
- ²⁰ Weber-Kellermann: a.a.O., S. 98 およびヴェーバー＝ケラーマン（前掲書）、243頁。
- ²¹ 聖ニコラウスとサンタクロースの関係については、Werner Mezger: *Sankt Nikolaus. Zwischen Kult und Klamauk. Zur Entstehung, Entwicklung und Veränderung der Brauchformen um einen populären Heiligen*. Ostfildern (Schwabenverlag) 1993 参照。
- ²² ヴェーバー＝ケラーマン（前掲書）、117-118頁。
- ²³ Weber-Kellermann: a.a.O., S. 100.
- ²⁴ ヴェーバー＝ケラーマン（前掲書）、256頁。
- ²⁵ 20世紀のサンタクロースと父権の失墜については、Dominik Schmitt: „*Der alte Kindergott ist tot!*“ *Weihnachtsmann-Darsteller und das Scheitern bürgerlich-patriarchalischer Autorität in der Weihnachtssatire des 20. Jahrhunderts*. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2013 参照。
- ²⁶ 「きよしこの夜」(1818) とほぼ同時期の 1816 年にヨハネス・ダニエル・ファルク (Johannes Daniel Falk, 1768-1826) によって詞が付けられた「いざ歌え、いざ祝え」O du fröhliche については、Gerhard Blail: *O du fröhliche. Die Geschichte unserer schönsten Weihnachtslieder*. Stuttgart (Quell) 1994, S. 62-72 参照。なお、「きよしこの夜」の作曲はフランツ・クサーヴァー・グル

ーバー (Franz Xaver Gruber, 1787-1863) であることが判明しているのに対し、「いざ歌え、いざ祝え」のメロディは、シチリア発祥であること以外、詳細はわかっていない。

²⁷ 1933年のクリスマス文学を扱う本論では触れる余裕はないが、この場面に関連し、19世紀を代表するクリスマス文学の『くるみ割り人形』では、ガラス戸棚の中のくるみ割り人形やその他の人形が、少女マリーの目の前で動き出し、話し始めるところから物語が始まっていた。ガラス越しに売り物の人形を見つめても、何の反応も得られないアリとの対比は著しい。

²⁸ フランダーズ (前掲書)、174頁。

²⁹ Vgl. Weber-Kellermann: a.a.O., S. 124f.

³⁰ この傾向は20世紀後半には、さらに加速されて展開される。20世紀後半の欧米文学に描かれたクリスマス、とりわけサンタクロース表象と近代市民家族の崩壊については、注25で挙げたシュミットに詳しい。

本研究はJSPS 科研費 18K00446 の助成を受けたものである。